

Waseda University, Tokyo  
Hokokyo  
Sci. Eng. Res.

早稲田大学

理工学研究所報告

第129輯

BULLETIN  
OF  
SCIENCE AND ENGINEERING  
RESEARCH LABORATORY

WASEDA UNIVERSITY

No. 129

# エジプト・マルカタ王宮「Room H」天井画 における聖刻文字例の復原研究

西本 真一\*

## Restoration of the Hieroglyphic Inscriptions on the Ceiling of Room H at Malkata Palace

Shin-ichi NISHIMOTO

(Received 18 April 1990)

The palace-city of Malkata was built by Amenhotep III on the west bank opposite the ancient southern capital of Thebes in Egypt. It was excavated and surveyed by the several investigators from 1888 onward, but the Egypt Architectural Mission of Waseda University resumed explorations there from 1985 to 1988 in order to study on the wide variety of decorative motifs.

From "Room H" located in the center of the Palace of the King, a large number of painted mud fragments were recovered. Some of them bear the parts of the hieroglyphic inscriptions, including the cartouches of nomen and prenomen which are under the wings of each vultures goddess Nekhbet.

In the following discussion the monumental hieroglyphic inscriptions painted on the ceiling of the nave at "Room H" is reconstructed by using the actual painted fragments.

**Key Words:** Ancient Egypt, Malkata, Palace, Hieroglyph, Painted Ceiling, Inscriptions, Nomen, Prenomen

### 1. ま え が き

古代エジプト新王国時代において最も権勢を誇った王はアメンホテプ三世 (ca. 1417-1379 B.C.) であり、この王によって建立された日乾煖瓦造の王宮址が現在でもルクソール (古代名「ラーベ」) 西岸の「マルカタ」と呼ばれる地域に残っている (Figs. 1 and 2)。

おおよそ3km四方にわたる礫砂漠には、「王の宮殿」(Fig. 1, A) をはじめとして、アメン神に捧げられた神殿 (Fig. 1, I) や王族たちのものと云われる住宅址 (Fig. 1, E) など種々の施設が点在するほか、港灣施設あるいは祭祀施設として用いられたという巨大な人造湖の跡も王宮に隣接

このように王宮都市と呼びうるまでに大規模で、しかも短い期間の間にほとんどすべての建築施設が建造された王宮の遺構としては、次代の王アケナテン (ca. 1379-1362 B.C.) の建立によるアマルナ王宮を除くと類例を見ることはできない。

マルカタ王宮に関しては前世紀の末から数度の発掘調査が行われてきており、刊行された正式な報告書の数は限定される<sup>3-6)</sup>ものの、当王宮から出土した土器片に基づく研究などについては欧米の研究者たちによって考察が重ねられている<sup>2)3)6)</sup>。特に、出土遺物に記された文字と敷地におけるそれらの分布状態から王宮各施設の使用と建立年代を探ろうとしたペイスの論考<sup>7)</sup>によって、少なくとも建築施設ごとのおおまかな性格や

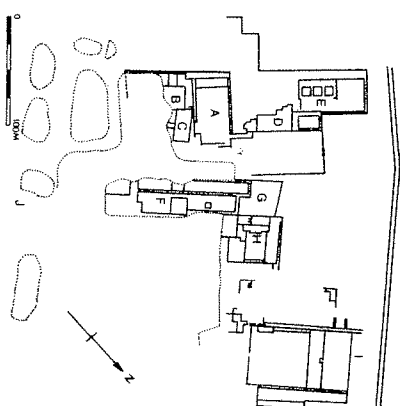


Fig. 1 General plan of Malkata Palace  
A, Palace of the King, B, South Palace, C, Kitchen, D, Middle Palace, E, West Villas, F, North Palace, G, Village Area, H, Audience Pavilion, I, Temple of Amun, J, Mounds of spoil sand of the Lake "Birker Habu"

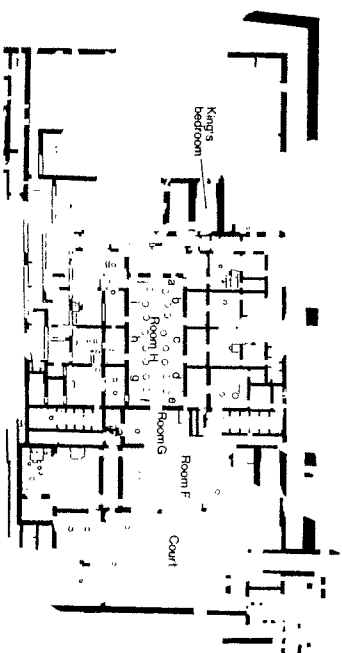
いっても過言ではなく、アマルナ王宮とはほぼ同時に発見された経緯を有しながらも、マルカタ王宮に関しては遺構についての第一次資料そのものが乏しいために、なされて然るべきこのふたつの王宮建築の比較研究を行うにも非常に困難が伴っ

### 2. 聖刻文字の出土状況

「王の宮殿」のはば中央を占める「Room H」からは、幾何学文様片<sup>9)</sup>、禿鷹の姿であらわされるネフベト女神神像片<sup>10)</sup>などのほかにも、数多くの聖刻文字片が出土した (Fig. 3~7)。こうした彩画泥片は壁面近くの床面から発見されているが、発

ているのが現状である。これは古代エジプト石造建築の研究に比べ、日乾煖瓦造建築についての研究が著しく立ち遅れていたことにも起因しており、石造建築についての研究から徐々に視野が広げられて、むしろ当時においては圧倒的多数を占めていたはずの古代エジプトの日乾煖瓦造建築に欧米研究者の目が向けられ始めている今日、当マルカタ王宮建築を観察し、考察を加えることには重要な意義があると思われる。

筆者は1985年から1988年にかけて行われた早稲田大学古代エジプト建築調査隊に参加する機会を得て、当マルカタ王宮から出土した夥しい量の彩画泥片の分析研究を主に担当した。本稿ではこの発掘調査で得られた資料をもとにして、当王宮の「Room H」と呼ばれる部屋<sup>8)</sup>の天井に描かれていた建築装飾画のうち、特に従来、具体的に報告されることのなかった聖刻文字について考察を行うこととする。



掘調査に際しては彩画片の出土位置によって「Room H」を10ヶ所に区分し、記録を行った (Fig. 2)。S(W)地点からは大きな彩画片が折り重なるようにして出土したが、ここからは植物を束ねて作られたマツト状の下地材 (以下、「マツト」と略) も同時に見つかった (Fig. 3a)。一定以上の厚みを有する彩画片の裏側にはいずれも特徴的な圧痕が見られ (Figs. 3e, k), これは泥セルタルによる仕上げ塗りを支持するための下地材の痕と思われる。出土したマツトは寸法・形状ともに多くの彩画片の裏側に残るこの圧痕とよく符合し、タイトゥスが仮報告書の中で触れている天井支持材についての記述<sup>11)</sup>とも一致するため、出土したマツトは天井下地材であって、上述した圧痕を有する彩画片はかつては天井の一部を構成していたと考えられる。彩画片の裏面にはほかに日乾煉瓦の圧痕を残すものも見られるので、こうした特徴を手がかりとし、天井を構成していた彩画片と壁面を構成していた彩画片とを明確に識別することができた。

この部屋の、西側の壁のほぼ中央部分であるW(M)地点からは、ほとんど彩画片が出土しなかった。またこのW(M)地点と反対側に位置するE(M)地点からは何も出土せず、結果として「Room H」の彩画片は、この部屋の四隅に集中して埋められていたことになる。このほか、S(E)地点からほとんど彩画片が出土しなかった。

### 3. 聖刻文字片の種別

出土した彩画片は前述したように、裏側の圧痕の有無によって壁面を構成していたものと天井を構成していたものとに分けられる。ただし出土した彩画片の裏面にはほとんどの場合、天井下地材の圧痕が認められたので、彩画片全体の量から比較すればかつて壁面を構成していたものよりも天井にあったと考えられるものの方が多く遺存していることが了解された。

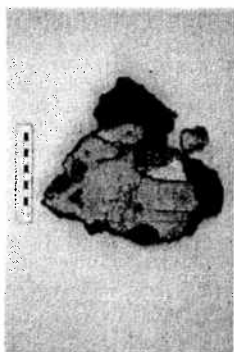
のうち、聖刻文字を縦に記した例が数片うかがわれた (Fig. 3b; Fig. 7, D1-6) か、天井材の痕を残すものと比べて文字の大きさはかなり小さく、描法も横書きのものと異なっている。またこれらの文字片は、神殿や墓の壁面によく見られるように行を区切る縦線の間に記されることが多く (Fig. 7 D1, 3, 4-6)、縦書きの聖刻文字に關しては以上の観点から天井に記されていたものではな

く壁面に書かれたものであると判断される。

聖刻文字片はカルトゥージュ内に記される場合を除いてすべて黄色地の上に描かれ、文字の下には赤線による下書き線がいくつかの箇所で見られた (Fig. 6a C10, 6b C18, C24, 7 D1 など)。またこの各々の文字の下書き線とは別に、文字列を揃えて書くために引かれたと思われる補助線が、聖刻文字の上端と下端に接して水平に引かれているものうかがうことができた。この補助線の色彩によって、文字片はさらに2種類に分けられる。ひとつは赤線による補助線が引かれた文字片であり (Figs. 4a A1, A5; 4c A10; 4d A11; 5a B4, B8; 5b B11, B15)、他方は白で補助線が引かれている文字片である (Fig. 6a C1, C5, C10, C11; また Fig. 6b C16)。後者はS(W)地点とW(S)地点からのみ出土しており、また文字に關しても、赤で補助線が引かれているものと異なっていた。

一方、王名を記したカルトゥージュ片も多く出土したが、これらについてはカルトゥージュ内の文字によって上下エジプト王名の一部であるものと、サッラー名の断片であるものとに区別される。一定の大きさ以上を有する聖刻文字片では、左から右読みのものか、あるいは右から左読みのものかについて判別が可能であった。

また文字の断片と同時にネクト像の一部、あるいは黄色地に近い、偶より白一青一白一赤一白と続く色帯の一部と思われる文様が、聖刻文字と連続して描かれている彩画片も見られ、これらは文字、ネクト像、色帯とが「Room H」の天井画において互いにどのような位置関係を有していた



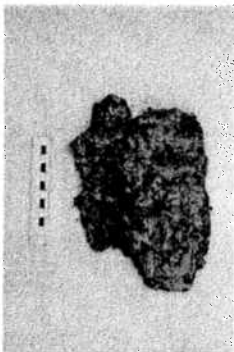
a: Fragment of "ntr nfr" sign (Fig. 4a, A1)



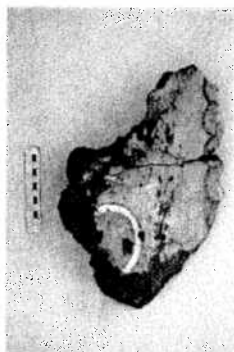
b: Fragment of Prenomen cartouche (Fig. 4a, A2, A3)



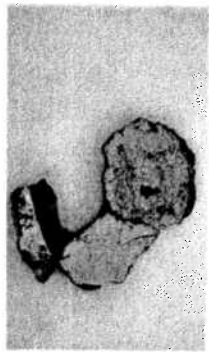
c: Part of "nh" sign with Border (Fig. 4b, A7)

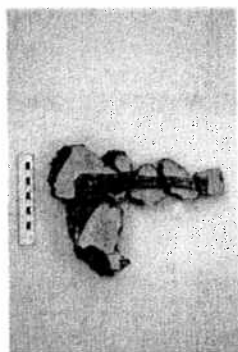


d: Fragment of "g3" sign and a part of cartouche (Fig. 5a, B2)



e: Reverse side of the fragment in Fig. 3d

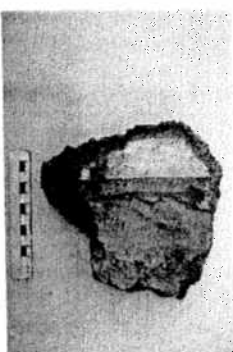




i: Assembled fragments of "p"-sign with inscription painted in brown (Fig. 6a, cl)



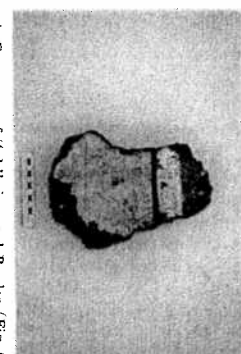
k: Reverse side of the fragment in Fig. 3j



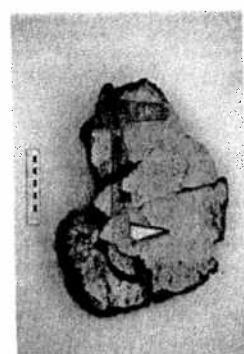
m: Part of "j"- and "w3s"-sign (Fig. 6a, C8)



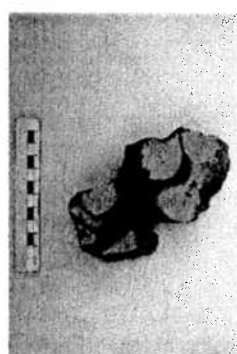
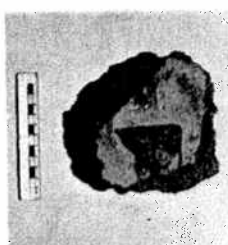
n: Part of "p"-sign with inscription painted in brown (Fig. 6a, C11)



j: Fragment of "nb"-sign and Border (Fig. 6a, C4)

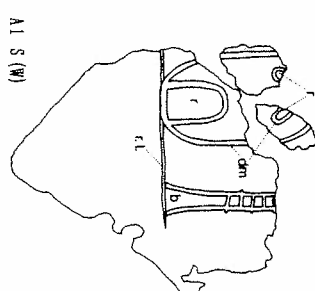


i: Fragments described "di", "nb" (Fig. 6a, C5)



q: Part of wall inscription, "p3"-sign (Fig. 7, D2)

Fig. 3 (continued)



A1 S (W)



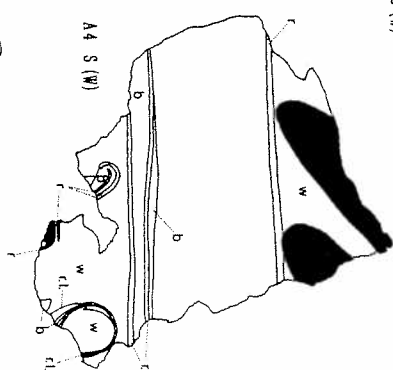
A3 S (W)



A2 S (W)



A4 S (W)



A1 S (W)

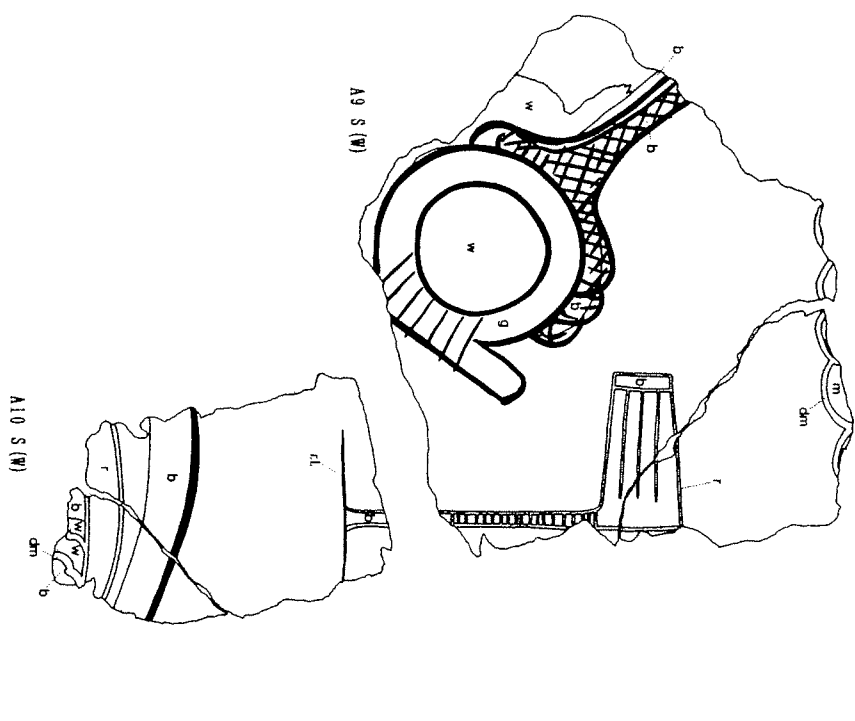
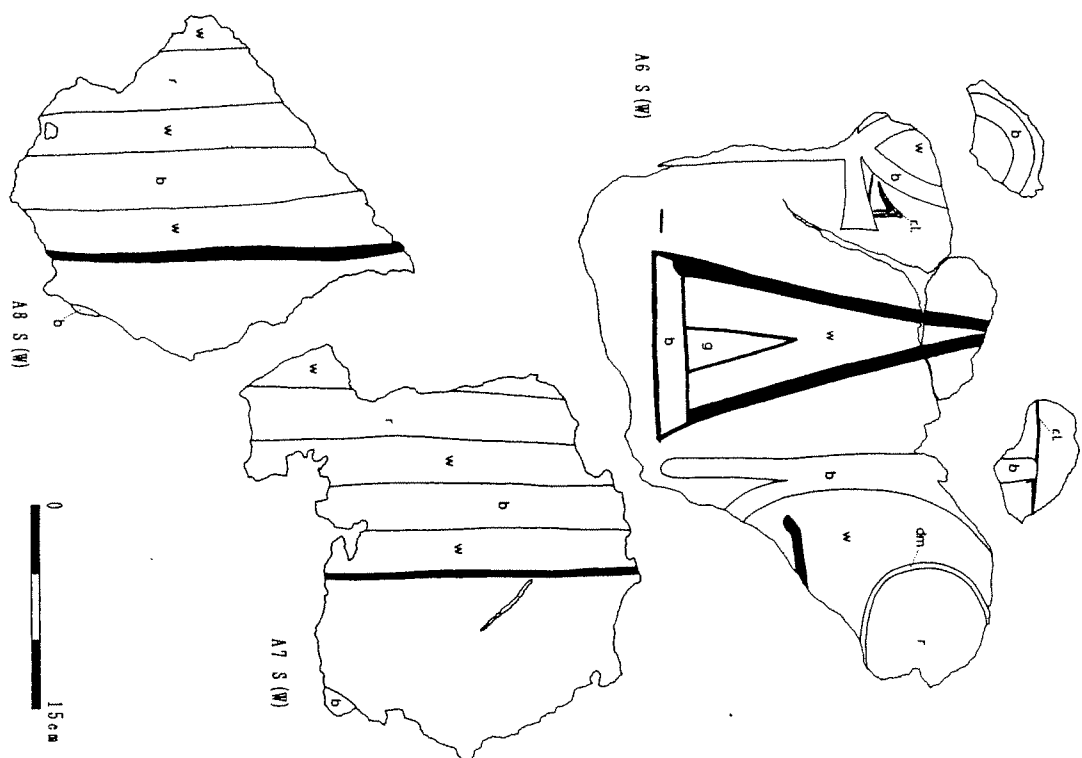


Fig. 4c: Hieroglyphic fragments read from left to right

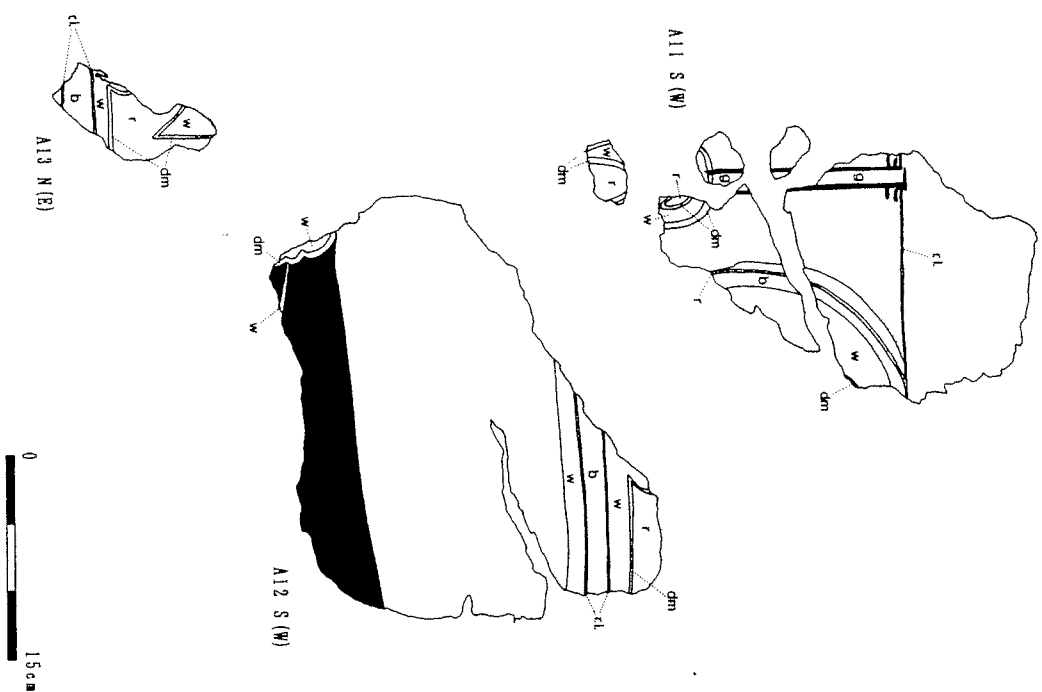


Fig. 4d: Hieroglyphic fragments read from left to right

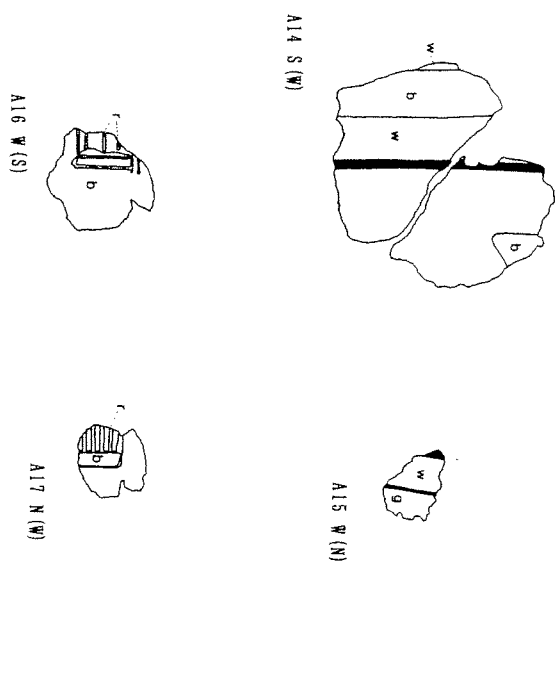


Fig. 4e: Fragments of hieroglyphic inscriptions, orientation unidentified

Figs. 4a-e: Fragments of lines of inscription including Ptenomen cartouche found from Room H. Solid black represents black; plain areas transparent yellow on white ground unless otherwise labelled. The color labels are: r=red; b=blue; g=green; w=white; m=maroon; dm=dark maroon; r.l.=red line (presumably line of preliminary sketch);

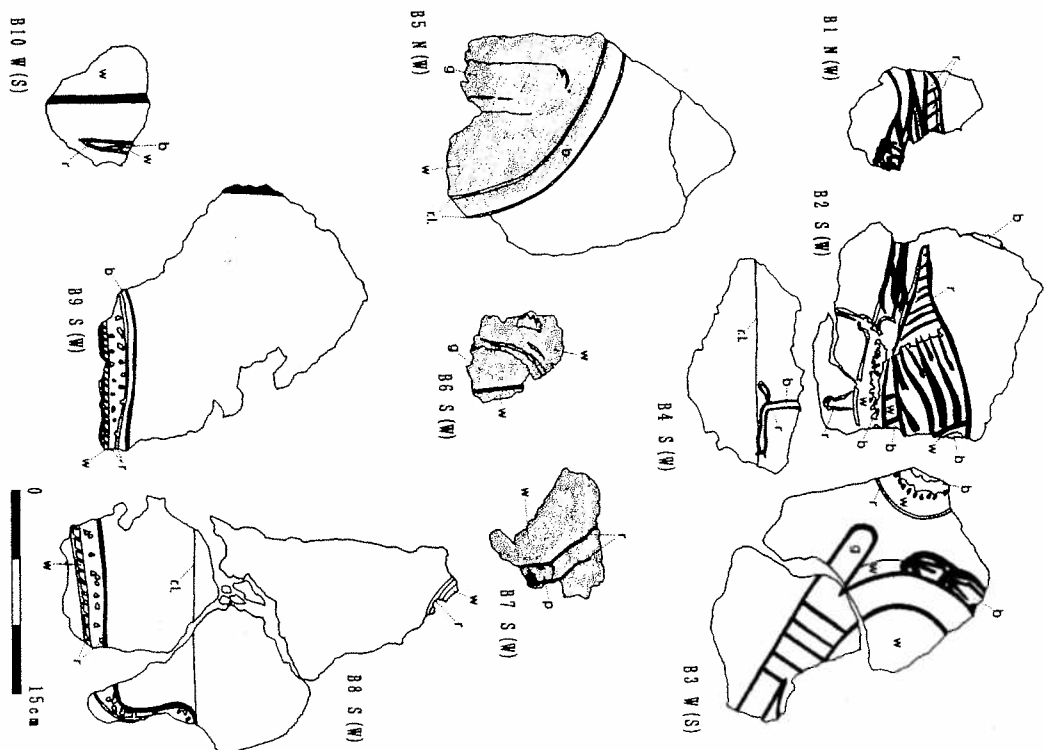


Fig. 5a: Hieroglyphic fragments read from right to left

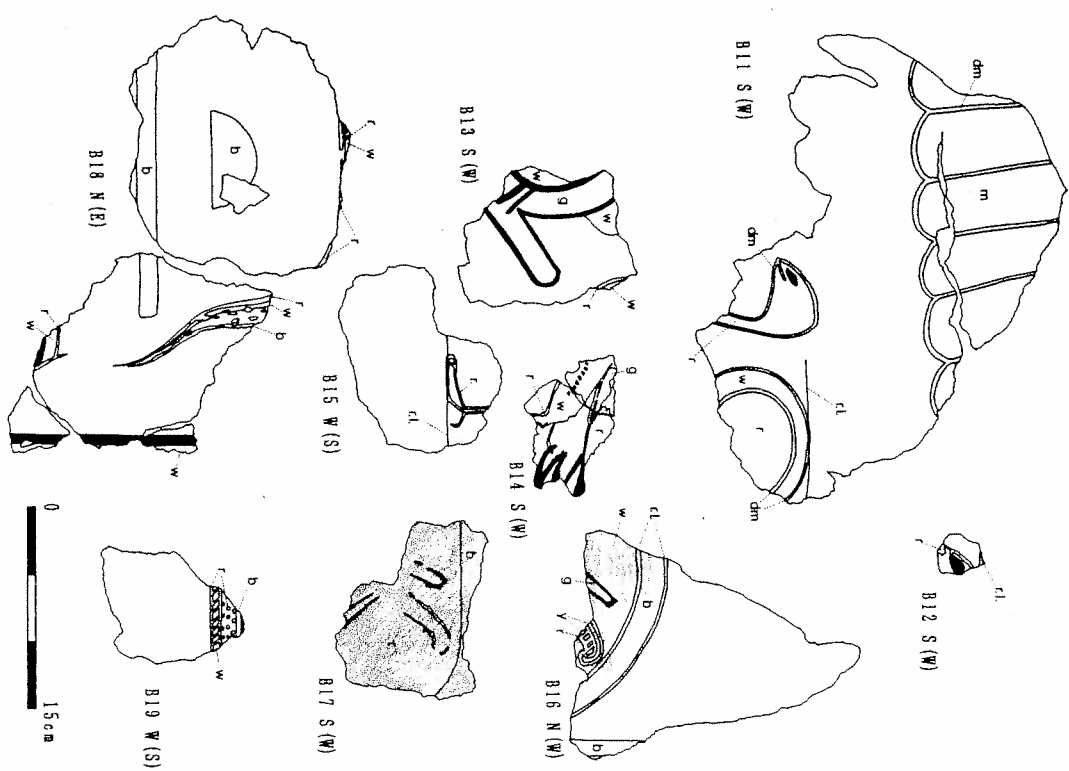


Fig. 5b: Hieroglyphic fragments read from left to right

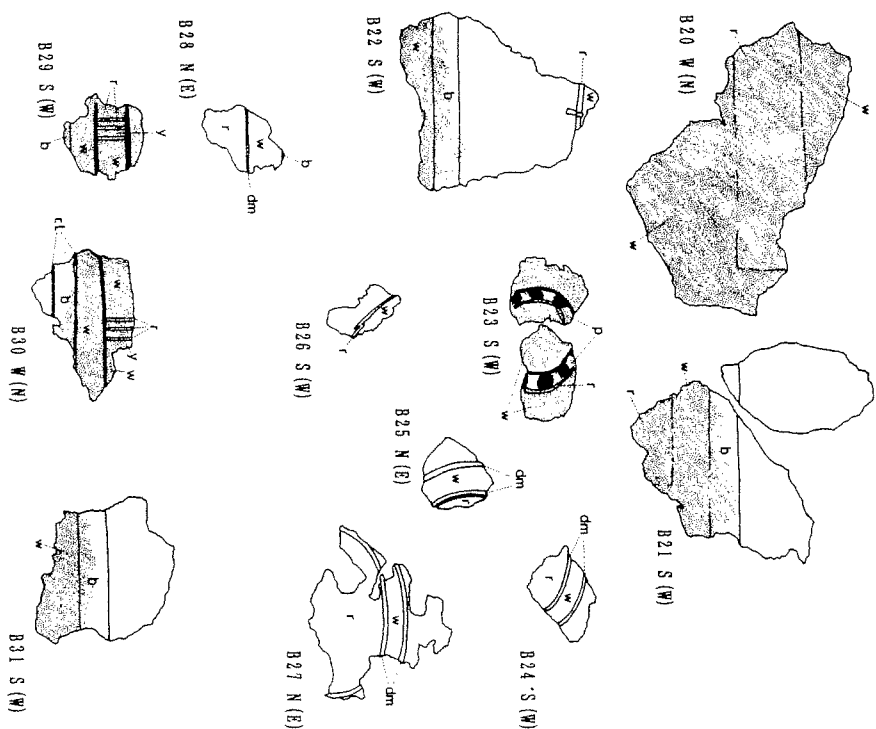
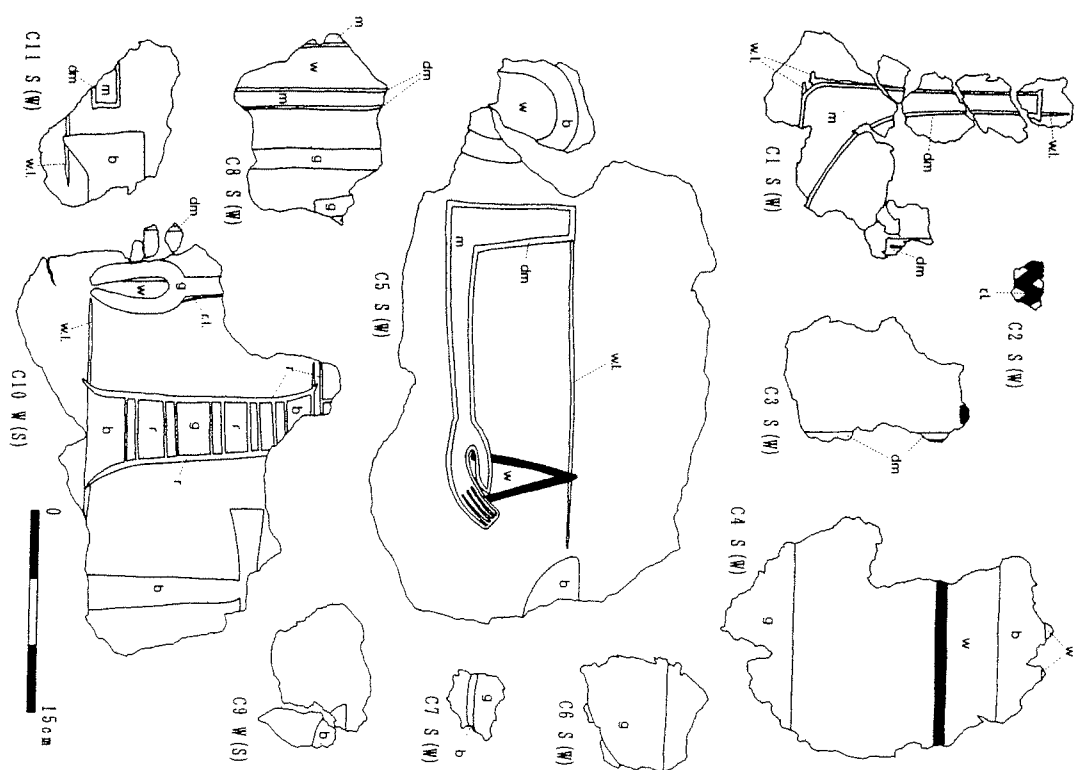
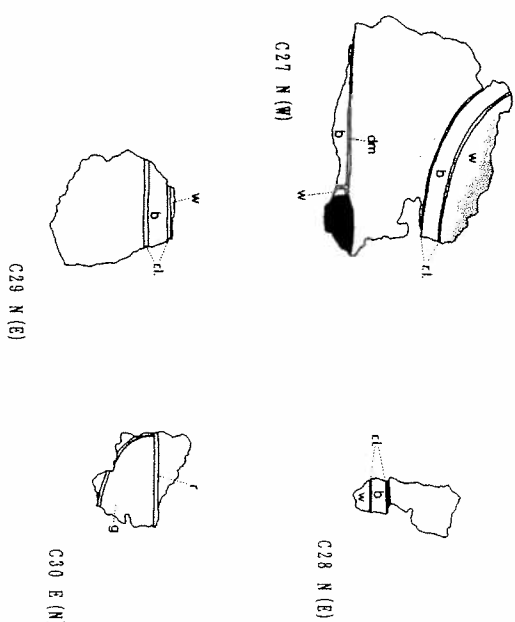
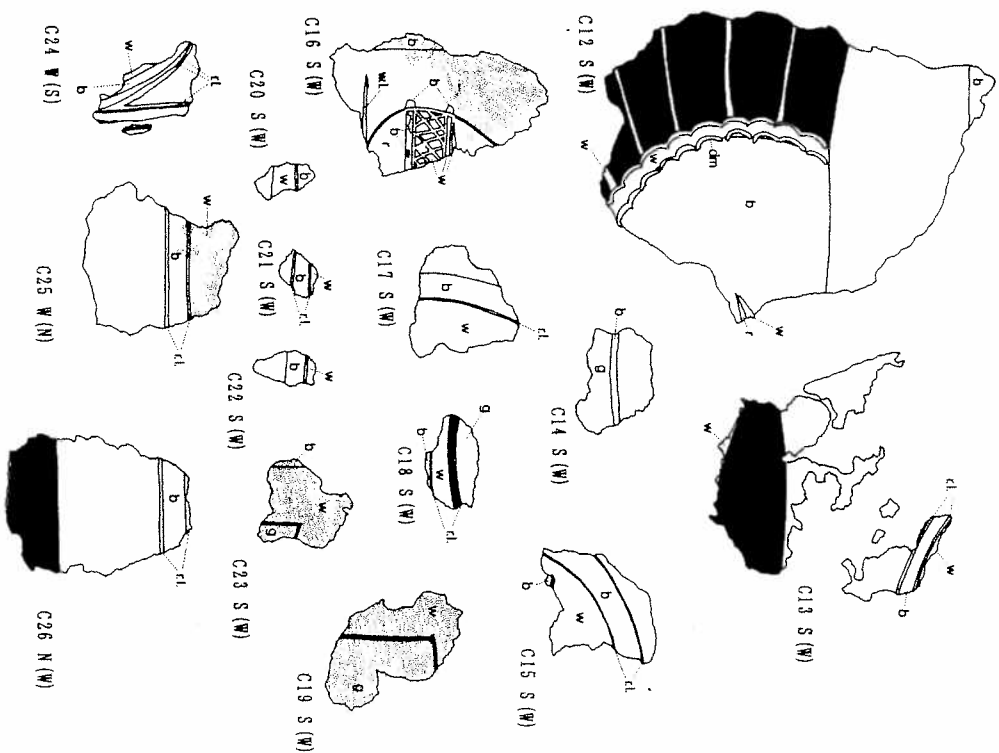


Fig. 5c: Fragments of hieroglyphic inscriptions, orientation unidentified







Figs. 6a-c. Other fragments of hieroglyphic inscriptions on ceiling found from Room H

Solid black represents black; plain areas are transparent yellow on white ground unless otherwise labelled. The color labels are: r=red; b=blue; g=green; w=white; m=maroon; dm=dark maroon; v=yellow; r.l.=red line

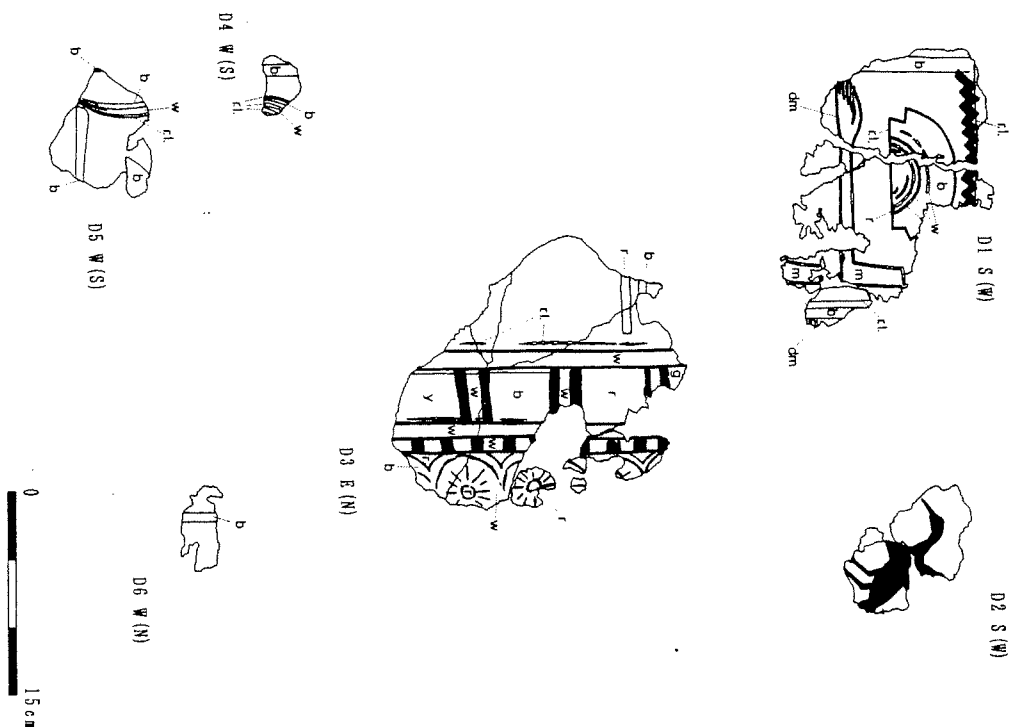


Fig. 7 Fragments of hieroglyphic inscriptions on wall found from Room H

Figs. 4a-e は上下エジプト王名を含む文字列の断片, また Figs. 5a-e はサ・ラー名を含む文字列の断片だけを類別し, 図示したものである。Figs. 4a-b, Fig. 5a では各々の文字列のうち, 右から左に読むものを, Figs. 4c-d, Fig. 5b では左から右に読むものを集めている。Fig. 4e, また Fig. 5c に図示した文字列は, それぞれの文字のうちで右から左に読むものか, 左から右に読むものかがはっきり判別できないものを集めた。Figs. 6a-e は上記の文字列に含まれない文字片であって, 同時に上下エジプト王名の断片か, サ・ラー名の断片かの識別が困難な文字片に関してもここで一括して扱っている。

Fig. 4 の A1 は文字 “ntr nfr” の一部であり, A2-A5 は上下エジプト王名の断片である。A6 は上下エジプト王名を記したカルトラージュの後半部分と, それに続く修飾語を示し, A7 と A8 ではその修飾語の最後の文字 “nh” の一部と色帯がかがわられる。A9 と A10 は文字列の最初の文字 “nfr” とその上下に位置するネクトベト画像の相互の位置関係を示す彩画片であり, また A11 では上下エジプト王名のカルトラージュの前の “nfr”, 及びカルトラージュ内の “R” を示す。A12 はカルトラージュとその下部に位置するネクトベト画像の黒翼の一部をあらわし, A13 はカルトラージュ内の “nfr” を示す。A14 は “nh” の一部と色帯, A15 は文字 “dt” の一部, A16 と A17 はともに “nfr” の一部である。

Fig. 5 の B1, B2, B3, B4 は文字 “s3” の断片であり, 特に B3 ではネクトベト像の足の一部も見られる。B5, B6, B7 はそれぞれサ・ラー名のカルトラージュ内の文字を示し, ヘイスが述べているように<sup>12)</sup>, いずれも消された跡が見られた。B8, B9, B10 はカルトラージュの後ろに続く修飾語 “dt” の断片であり, また B11 ではサ・ラー名を記すカルトラージュの前に書かれた文字 “s3 Re” と, その上部のネクトベト像の赤い翼が見られる。B12 は “s3 Re” の目の部分であり,

トラージュ内に描かれていた文字の一部であり, B24, B25 は文字 “R” の一部と見られる。B26 は文字 “s3” の一部であり, また B27 と B28 はともに文字 “Re” の断片であると思われる。B29 と B30 はカルトラージュ内の文字 “nfr” の一部であると考えられる。B31 もまた消されたカルトラージュの一部であることから, サ・ラー名を含んだ文字列にかつては属していた断片であるとみなされよう。

Fig. 6 の C1 は右から左に読む文字 “b” をあらわし, C2 は文字 “n”, C3 では茶色と黒に塗られた文字の一部分がかがわられる。C4 は “nb” の一部であり, C5 では C1 と同じく右から左に読む文字 “nb”, “dt”, “nh” などの文字が見られる。C6 と C7 は文字 “nb” の一部分, また C8 では茶色と緑で描かれた文字が見られた。C9 は文字の形状と色帯から文字 “r” の一部と思われる, C10 では “nh ddt w3r”, C11 においては “pr” と茶色の文字がかがわられる。C12 と C13 はカルトラージュの一部とネクトベト像の翼の断片をあらわしており, C14 では緑色の文字が見られた。これは文字 “nh” の一部である可能性が高いが, 断定はできない。C15 はカルトラージュの断片であり, 消されていないことから上下エジプト名と一応は考えられる。しかしながらカルトラージュ内に見られる文字片の色彩が, 上下エジプト王名で見られる文字のどれにも該当しないため, この断片を上下エジプト王名の文字列の範囲に含めることができなかった。C16 は文字 “mi” の一部分であり, またこの文字の左側には消されたカルトラージュの一部がかがわられた。白い補助線が文字の下端に接するように水平に引かれているのが注目される。C17 はカルトラージュの一部であり, C18 では緑色の文字が見られた。この文字はカルトラージュ内に描かれ, 上下エジプト王名の一部分か, 又はサ・ラー名を記す際に描かれる文字 ↓ のどちらかであると思われるが, 判断はできなかった。C19 と C23 も同様にカルトラージュ



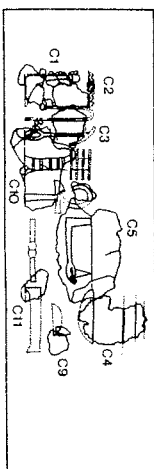


Fig. 8a Reconstruction drawing of the first line of inscription above the goddess Nekhbet on the ceiling of Room H

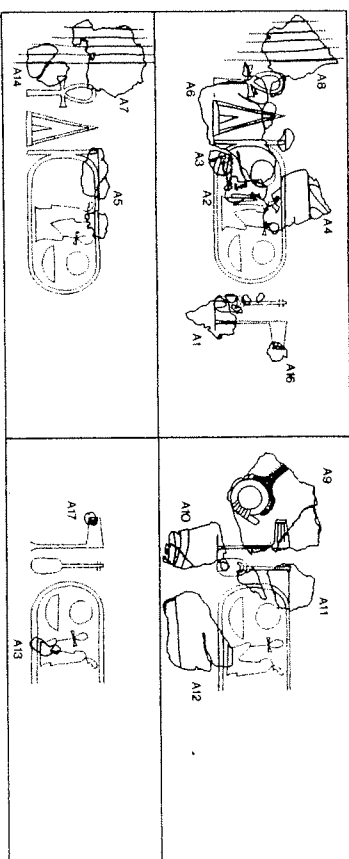
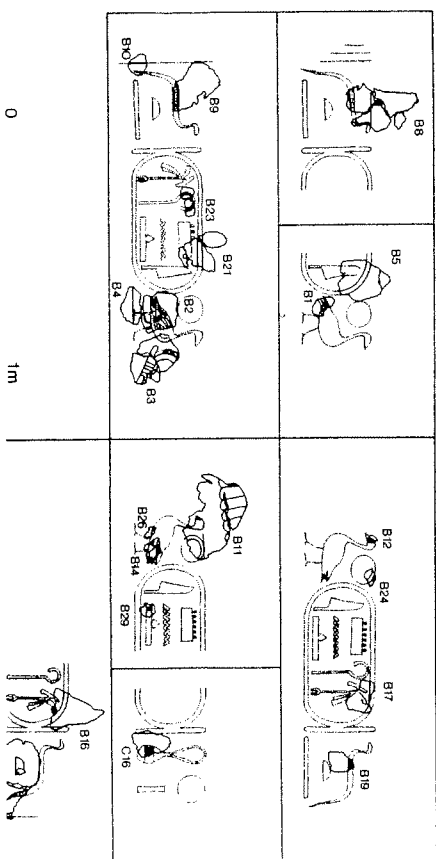



Fig. 8b Reconstruction drawing of the inscription including Prenomen cartouche between goddess Nekhbet on the ceiling of Room H



エジプト・ワルカタ王宮「Room H」天井画における聖刻文字列の復原研究

は、...  (...nbt pr di s  
nh ddt w3s snb), 「天空の女神, 彼女が生命・安  
定・権力・健康を与えんことを」であった可能性  
が高いと考えられる (Fig. 8a)。

以上、考察を行ってきた点をまとめれば、1：  
上下エジプト王名とサラーラー名のカルトゥーシ  
ュを含む文字列は、出土した彩画片から知られる  
ようにネクベト像の間に描かれていたこと、2：  
これらには文字列を揃えるための赤い補助線が引  
かれていたこと、3：上記以外に最上位に位置す  
るネクベト像の上には、上下エジプト王名やサ  
ラーラー名のカルトゥーシュを含む文字列とは内容  
の異なる文字列が存在し、4：またその文字列は、  
S(W) 地点、あるいは W(S) 地点に近い場所の天  
井にあったこと、5：その文字列には白い補助線  
が引かれていたこと、6：その後半部分の内容は  
「...天空の女神, 彼女が生命・安定・権力・健康  
を与えんことを」であったこと、などの点が明ら  
かにされた。

## 5. 結 語

Room H から出土した多くの聖刻文字列の描  
かれ方や裏面にうかがわれる状態から、まず壁面  
の断片と天井画片とが類別され、さらに後者につ  
いては文字列の内容に着目して分析を行い、  
Room H の天井画のうち、描かれた文字列に関し  
ては実際に出土した彩画片に基づいて文字列の内  
容別に3種類の復原図が作成されるなど、得られ  
た成果は少なくない。

ネクベト像とともに記される聖刻文字は通常、  
資料的に重要な内容を持たないため、これらにつ  
いては従来、深く研究がなされていなかったと言  
ってよいが、建築学的視点からは、連続するネク  
ベト像のうち最上位に位置すると思われるもの  
上に記された文字が S(W) 地点と W(S) 地点から

集中して出土している事実より、この部屋の内奥  
部に向けて空間的な序列性が高められていたこと  
をうかがい、知ることができ、当王宮に關しての建  
築学的研究を進める上で貴重な一資料が提供でき  
たと考えられる。

なお本研究は、文部省科学研究費海外学術研究  
(昭和60~62年度交付, 研究代表者・早稲田大学  
理工学部教授渡辺保忠, 課題: 「エジプト・ワル  
カタ王宮・魚の丘建築の復原調査研究」ワルカタ  
王宮址との建築学的・美術考古学的比較研究) の  
交付を受けた調査の成果に基づき、行われた点を  
付記する。

## 参考文献

- 1) Edwards, I. E. S. et al. ed., "The Cambridge Ancient History", Cambridge (1973), Vol. II (part 1), p. 819.
- 2) Darterry, M. J., *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*, Tome 4 (1903), pp. 165-170.
- 3) Tytus, Robb de Peyser, "A Preliminary Report on the Re-examination of the Palace of Amenhotep III", New York (1903).
- 4) Winlock, H. E., *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art*, Vol. 7 (No. 10, 1912), pp. 104-190.
- 5) Leahy, M. A., "The Inscriptions", Warmaster (1978).
- 6) Hope, C., "Jar Sealing and Amphorae", Warmaster (1978).
- 7) Hayes, W. C., *Journal of Near Eastern Studies* Vol. 10 (1951), pp. 35-40, 82-104, 156-183, 231-242.
- 8) Porter, B. and Moss, R. L. B., "Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs, and Paintings", Vol. 1 (part 2), London (1964), pl. XVIII.
- 9) 渡辺保忠, 他3名, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (1986), pp. 901-902.
- 10) 渡辺保忠, 他2名, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (1986), pp. 905-906.
- 11) Tytus, op. cit., p. 13.
- 12) Hayes, op. cit., p. 236.
- 13) Tylor, J. J., "Wall Drawings and Monuments of El Kab: The Temples of Amenhotep III", London (1898), pl. 7.